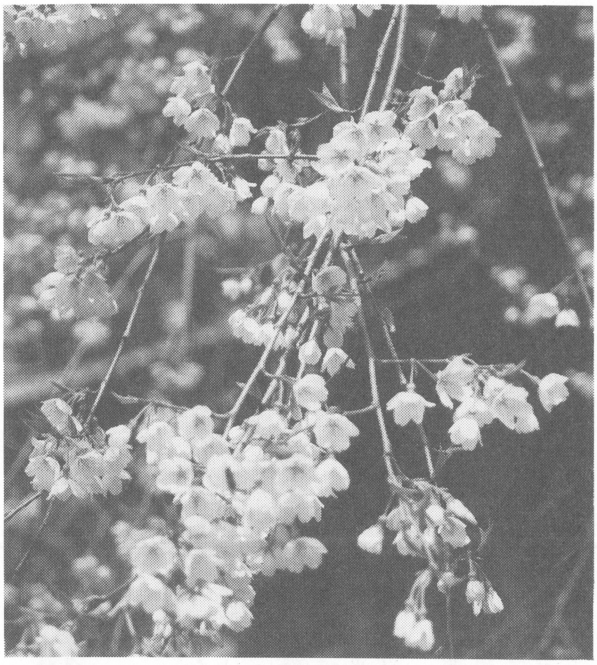


妙の光（たえのひかり）

通刊37号 **復刊14号**
1995年5月5日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 TEL0256-77-2025

枝垂桜

境内の春の花は、やぶ椿に始まり、梅、水仙、桜、ハナカイドウと続く。ことに桜は早咲きから、遅咲きの八重桜、山桜と一ト月近く楽しめる。早咲きがこの枝垂桜で、四月上旬が盛り。

枝垂桜と言えば、総本山身延山久遠寺が全国的に有名で、祖師堂前など、数多くの巨大な古木に咲く姿は見事。毎年この時期に合わせた参詣者、観光客で賑わう。古来より、神霊が山や高い木などを足場として天から降りて来て、垂れ下がった枝に伝わって祭りの場所へ降臨するものと信じられ、聖域にはこうした木が多く植えられてきたという。七夕の竹の紙飾り、しめ縄に捧げるシデの垂れ下がっているのも、ここからきているとか。

境内の枝垂桜は三本で、うち二本は先代住職が身延山で苗木を求めてきたもの。ある程度成長しないと花がつかない性質で、植えた先代は花を見ることができなかった。それが今や大きく成長し、三重塔の脇でその取り合わせが実に美しい。しかし張った根が石垣を崩し始めて、移植の必要性に迫られている。

北欧の「高齢者福祉」視察の旅

小川英爾

この二月、スウェーデンとデンマークの高齢者福祉を見学する旅に参加した。日本も高齢社会を迎えて、老後の過ごし方、社会の対応のあるべき形、そして宗教のはたす役割を私なりに考えてきた。福祉先進国と言われる北欧の実際を見聞して、その背景にあるものを知りたいと思い、知人の誘いを受けての旅だった。始めてのヨーロッパでもあり、充実してその全ては無理なので、印象深かったことだけを記してみたい。

参加者は二十七名。自治体関係者、医療従事者、弁護士、建築家等々さまざまな人達が各地から集った。これに解説のため大学の先生が同行された。八泊十日を前半がスウェーデン第二の都市ヨーテボリで、後半をデンマークの小さな田舎町ミゼルファートで、連日講義と見学で過ごした。暖冬で、用意した厚手の下着にホッカイロが邪魔になる程。新潟の方が寒いくらいだった。

スウェーデンのヨーテボリで、最初私のために市営墓地へと案内してくれた。市内に八カ所あるという墓地は、墓石の形こそ違うが緑豊かな中に整然と並び、日本の風景と変わらない。

九一年の総計で火葬する人は七六％。七一年から、子供がいない、子供に負担をかけたくないという人達の要望で、区域を決めて、墓石を建てず、遺骨を粉状にして直接土に埋める散灰を認めた。これが流行するかと思われたが、希望する人は毎年全体の十％以下にすぎない。しかも、その区域では禁止しているにもかかわらず、ローソクの灯が絶えることなく、また新鮮な花がいつも山のようにたむけられ、縁者のおまいりが途切れないという。

人のつながりで言えば、人口四十四万人のこの町で、一人暮らし世帯が全体の五十％強もあるという。それは子供が十八歳になると、皆親元を離れて一人暮らしを始め、少数だが大学に進む場合は奨学金を受けるなど、自活するのが普通。その結果若い人の一人暮らしと、親の世代のつれ合いを亡くした後の一人暮らし、それに高い離婚率からくる一人暮らしが多くなる。

そこで高齢者の一人暮らしが問題となるが、子供夫婦が同居して、親の世話に当るということはない。行政が徹底的にめんどうを見るし、その財源としてきわめて高い税金を市民が負担する。そうなった背景に、この国が戦争に巻き込まれず豊かだったため労働力が不足し、それを補うために女性の社会進出をすすめる政策をとった

ことがある。だからこの国には専業主婦がほとんどいない。高給取りの医者でも、妻が外で働かなければ税金が払い切れないと聞いた。

だから社会福祉が充実して、受ける側も権利として堂々と主張する。中でも高齢者福祉は、1.継続性の尊重、2.自己決定権の尊重、3.残存能力の活用を基本三原則にしている。例えば、自宅で一人暮らしの高齢者が、希望すれば在宅のまま、できないことだけを毎日の食事から医療まで、きめ細かなサービスが受けられる。その中には看護婦が車に乗った、夜間パトロールもある。一方、施設を希望すれば、自分の家具を持ち込んで、自宅のようにしてそこで最後まで迎えることができるよう、施設の側が対応することを目指している。

痴呆性老人の場合は、グループホームという形の施設が主流になっている。そこでは高齢者を六人前後のグループにし、一般住宅のような小さな施設で、ほぼ同数のヘルパーが交代で家族的介護をする。入居者全員が個室を持ち、日昼は居間に集まってそれぞれが好きにして過ごす。内部全体が明るく、家族的で、とてもきれいに飾りつけてあるのが印象的だった。

スウェーデンではキリスト教が国教で、国民の七十%が信者として国に教会税を収めている。それが教会の経費に回される。そのキリスト教の牧師を助けて、病院やホスピスで患者と接して、苦痛を精神的にやわらげる役を担う人を助祭と呼ぶ。これを養成する学校を訪れた。ここの入学資格は大卒か看護の専門教育を終えた人で、競争率も高いという。附属で障害を持つ子供の施設から、老人ホーム、ホスピスまであって、学生の実地訓練が行なわれている。そこではキリスト教の精神に基づき、個人の尊重と、一人の人間が最後まで気持ちよく生きていくために、体・心・魂の調和をはかることを根本理念としているという。北欧社会の個人主義と社会福祉充実の背景には、その根底でキリスト教が深く関っていることを実感させられた。

インドで生れた仏教も、お釈迦さまの時代には個人の悟りが説かれ、そのために出家が求められた。それが中国を経由して日本に伝わる中で、個人よりも家族、同族といった集団への関わりが強く説かれるようになった。北欧で印象深かったことの一つに、どこの施設でも入居者は必ずと言っていい程、自分の部屋に家族の写真をいっぱい飾ってあった。私達訪問者に対して、アルバムを開いては息子夫婦、孫の話を一生懸命してくれる。こうした家族の訪問も頻繁だという。個人主義の北欧で、別々に暮らすが家族の精神的結びつきが強く、家族介護を言う日本で、その内実は家族の結びつきが弱いという現実を、しっかり考えたい。

工業国スウェーデンが施設重視に近い一方、農業国デンマークは家族介護ではない在宅サービスを重視している。どちらも理想的で完成した社会福祉ではもちろんないが、弱者を援助するという考えの徹底ぶりは、日本のはるか先を進んでいるのは確かだった。

信心

三代の住職に仕えた半世紀

巻町　内藤　八十一　さん
故　リイ　さん

「潟のばあちゃん」と皆に親しまれた巻町の内藤リイさんが、二月九日になくなられた。行年八十六歳。一年半にわたる入院中、ずっと付き添ってきた夫の八十一さんも、一時は力を落としたが、今は元気を取り戻された。

今回はこのお二人を紹介した日蓮宗新聞（昭和60年9月20日号）を転載し、リイさんのご冥福をお祈りする。

合掌

「私たちは三代のご住職にお仕えしてきました。お祖師さまのご遠忌にも、二回遇わさせていただきました。私たちの人生は、お寺なしでは語れないんです」

新潟県西蒲原郡の角田山妙光寺（小川英爾住職）の世話人の内藤八十一さん、リイさん夫妻（ともに七十五歳）は、お寺に身も心も捧げつくして生きてきた。

お寺が人寄せで忙しければ、農作業をうまくやりくりして、三里の道のりを歩いてやってくる。建物や境内の整備、台所仕事もこなしていく。法華経の提婆品に、薪および木の実、草の実を採って給仕するとある。日蓮宗はなによりも仏さまへの給仕が第一と考えるから、檀信徒のお手本がこの二人といえる。

内藤さんが住んでいる米どころ越後の蒲原平野は、信濃川水系の氾濫で、長年水害に苦しめられてきたところ。二人は、この平野の中心に遊水地としてもうけられた鎧潟という沼の排水機番人として、わずかな水田を耕作して生計を立ててきた。三年に一度という出水に苦労の歳月が流れていった。

結婚は昭和六年、二十一歳のとき。貧しいながらも誠実な八十一さんは、檀家の娘さんでお寺の手伝いに来ていた働き者のリイさんを見込んだ。妙光寺先々代住職の肝いりで結ばれた。

翌年、宗祖六百五十遠忌のとき、ご遠忌奉行の過労がたたってか、

先々代住職が遷化、先代住職（小川英一上人）があとを継ぐと、そのもとへ東京から住職夫人が嫁入りしてきた。住職夫人がリイさんと同年齢ということもあって、リイさんのお寺参りもひんぱんになった。

「私がお仕えした先々代のご前さまは、それは厳しい方でした。でも、とても立派な方でしたから、ありがたいと思っています。奥さまには、子どものようにかわいがっていただきました。先代のご前さまには、実家の母のことやら何から何まで心配していただきました」とリイさん。

だが、その先代住職も昭和四十九年に遷化、法嗣の現住職が立正大学を卒業してあとを継いだ。その若い住職を支えて、八十一さんはお寺の他の役員さんたちと共に、二百軒の檀家の先頭に立って七百遠忌記念の梵鐘再鋳、工事費一億円をこえた新客殿の建立を成しとげた。

妙光寺では、毎年四月、「ご判様」と呼ばれ、日蓮聖人御作と伝えられる印鑑を開帳する行事が二日間夜通し営まれるが、その前の味噌作りからはじまる台所仕事のすべてを、リイさんは、五十年間つづけてきた。

七百遠忌、全国日蓮宗青年会の悲願だった全国縦断唱題行脚にも、リイさんは参加。住職と共にうちわ太鼓をたたいて一日三十キロを行脚した。地元巻町の講中にあっては講元を助け、相談役でもある。

八十一さんは長年、農協の理事、土地改良組合の役員をつとめ、その信望も厚い。

昭和三十三、三十六年と記録的大水害にみまわれながらも、農家の先頭に立って鎧潟の排水工事を国にはたらきかけて、四十三年には見事に完成した。

蒲原平野の農民を困らせた鎧潟も、いまは広々とした水田に変わった。まわりには県の農業センター、農業高校・農業大学校・農協学園が次々と建てられ、農業教育の中心地となった。

むかしは船で鎧潟を行く人たちが昼の弁当をひろげるたまり場にリイさんがいた。いまは、農業学校へ通う先生や生徒にしたわれている。

妙光寺の檀家の人たち、地域の人たちからも、「潟のじいちゃん、潟のばあちゃん」と親しまれている。いつまでも元気にとみんなが願っている。

寺の動き

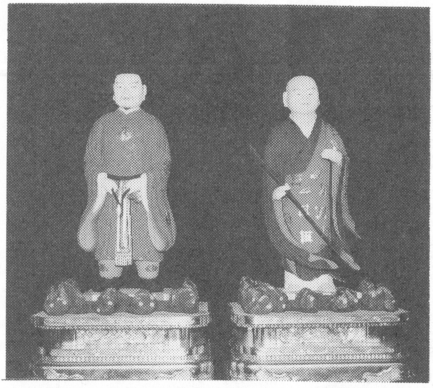
総代・世話人会議報告

去る三月十九日、総代・世話人会議を開催し、護持会の平成六年度決算、同七年度予算、その他を協議いたしました。会議の内容は、護持会会報として会計報告とともに、全檀家にお知らせしていますが、今回重要項目もありここでご報告します。

妙光寺では現在、総代三名、各地区からの世話人が、今回大野より一名加わって十八名の計二十一名の役員構成です。

題目堂仏像再建、修復完成

数年前に盗難に遭った、題目堂の八幡大菩薩像再建と、残った日蓮聖人像の修復がりっぱに完成しました。このために、昨年四月から檀信徒の皆様にご寄付をお願いしてきました。おかげさまで目標額を上まわる百十万円が、百九名の方々から寄せられました。



完成した日蓮聖人像・八幡菩薩像

三月始めに完成し、お彼岸の中日法要にあわせて開眼法要を営みました。法要後題目堂に安置する予定でしたが、角田浜の斎藤政六さんより、老朽化した題目堂水屋の解体修理と、題目堂の一部増築の申し出をいただきました。現在工事が進行中ですので、近々完成しますと安置します。たくさんの方々のご協力に心より御礼申し上げます。

「ご判さま」行事一日だけに

四月二十七、八日の二日間にわたる「ご判さま」ですが、これを平成八年から二十八日の一日だけにします。

日蓮聖人が佐渡配流中に、遠藤氏に授けられたご判（印鑑）をご開帳するのが、「ご判さま」と親しまれてきたこのお祭りです。以前は二十七日の午前十時から、現在は午後四

時から二十八日の午後まで、延々と法要とお説教が続きます。文字通りの通夜説教は、全国的にみても極めてめずらしくなりました。

昭和三十年頃までは、近郊近在の村々が全て農作業を休み、老若男女、参詣の人の列が妙光寺を目指しました。境内では露店が軒をつらね、風呂屋まで出ました。大正十年の記録に、参詣者三千人とあります。時代の移り変わりとともに参詣者も年々減少し、近年は二十八日の昼で三百人くらいあるものの、二十七日深夜は六十人程と寂しいようです。

それに引きかえ慌だしい近頃、丸二日間にわたってお手伝いの檀家の方々、応援の僧侶の方達の人数確保が困難な状況です。その背景の一つに、農作業の繁忙期が一カ月早まって、この時期に重ったことがあります。

そこで前々から期日の変更を検討してきましたが、それもむずかしく、次善の策として日程の短縮を決めました。妙光寺の檀家に限らず、広く地域の人達、全国の信者の方々に幾多の思い出がある「ご判さま」です。時代の流れに抗しきれず、残念ではありますが、今後は集中して盛り上げて行きたいと思います。引き続きご協力をお願いします。

本堂、祖師堂建て替え計画

近年、本堂及び祖師堂の老朽化によるいたみがひどく、建て替えるなら積み立てが必要だから早く始めた方がいい、という声が寄せられるようになりました。

妙光寺は正和二年（一三一三）の創立以来六八二年、現住職で五十三代目という歴史です。現在の本堂は宝暦六年（一七五六）六月二十九日夜に焼失、同十四年（一七六四）七月二十日棟上げという記録ですから、今年で二三一年たっています。祖師堂は文化十四年（一八一七）正月建立とありますが、新築か再建かは不明です。こちらは一七八年目ですが、材料が悪くいたみもずっとひどい状態です。

現在の床面積は、本堂が八間半四面で七十二、二五坪に回廊がつき、祖師堂は七間の五間で三十五坪となっています。

会議では以下の三案に整理して検討しました。A案―本堂、祖師堂を合計百坪程に縮小して新築。仏具の修復、境内の外溝工事、諸経費で二億五千万～三億円の予算。B案―本堂は応急修理程度にして次の代に託す。限界である祖師堂の新築と関連する境内の外溝工事、諸経費で一億円予算。C案―不況の時代でもあるし、現状では何もできない。

結論として、確かに大変厳しい時代ではあるが、実状を見れば何もし

ない訳にはいかない。本堂の応急修理と言ってもかなりの費用がかかることは確実で、長い目で見ると結局は捨て金になることが多い。また本堂をそのままにして祖師堂だけ解体、工事することも敷地的にむずかしい。という理由で、A案の本堂、祖師堂両方の新築、という方針を一応決定いたしました。

しかし現実的には経費的に大変な困難がともないます。そこで基本的な設計方針と概略の予算総額。ご協力願う檀家の皆さんのご意見。これらを今後一年かけて調査研究することにしました。

無理だ、協力できない、と言うことは簡単です。しかし、この先になればなんとかなるかも知れない、という時代でもありません。じゃどうすればいいか、をお考えの上ご意見をお寄せ下さい。役員会としては強行するつもりも全くありませんし、できるものでもありません。皆さんのご協力をいただいて、より良い方向に進めたいと願っているだけです。ご理解をお願いいたします。

新規墓地永代使用料変更

畑地を潰して墓地として整備、檀家に限り供してきました。近年、以下の理由でその永代使用料が実勢に合わなくなりましたので変更しました。

墓地の永代使用料は、参道、枠組み、排水、水道整備、植栽等を含むため、通常地価の三～四倍が一般的なこと。これまで山の墓地から降りてもらうために、安価に設定してきた。しかしすでに二十年も経過し、降りる人はたいて降りたし、残っている人でも墓地を契約した人が大半なこと。建墓していない墓地で、日当たりが良くて除草が大変なために、コンクリートを張った。その経費が大きいこと。

以上の理由で、平米当四万円。普通型四平米十六万円。大型九平米三十六万円とします。この入金一切は墓地及び境内の整備に使用されてきています。

鎌田義明君、信行道場へ

昨年春から弟子として修業してきました、秋田県出身の鎌田義明（改名して、かまだぎみょう）君が、四月十五日より身延山での日蓮宗信行道場に入りました。

僧侶としての最初の修業で、期間が三十五日。朝四時の水行に始まって、本山の朝勤、読経、法要、説教、教学の勉強と、夜九時の就寝まで続きます。ここを終えて初めて、正式な日蓮宗の僧侶と認められます。

今後、檀家のお宅の法要の席に、住職が連れて伺うことになるかと思います。そうした一連の対応につい

ては、役員と相談の上で改めてお知らせする予定です。

佐渡団参の予定

たびたびお知らせしていますが、希望の多い佐渡への団体参拝旅行を、十一月の六・七日（月・火）に行ないます。詳細は現在旅行業者と接渉中ですので、決まり次第ご案内します。

池庭工事の着工

前にお伝えしましたが、新潟市の遠藤茂五郎さんのご寄付で、参道脇の池庭工事が、五月連休明けに着工の予定です。用地が広いものですから今回は滝を中心に工事する計画です。

遠藤さんは妙光寺の檀家ではないのですが、母方の親戚に妙光寺檀家が多く、ご縁があって妙光寺が大好き。「元気なうちは境内を美しくするのに協力したい」と話しておいでです。

五年前、十年前、十五年前の境内を思い出してみて下さい。遠藤さん始め実に多くの方々のご協力で、すっかり美しくなりました。心より御礼申し上げます。引き続き排水、道路整備、植栽等の継続をはかります。

お盆法要の袈裟奉納

八月一日のお盆、施餓鬼法要で式衆が着用する、元政七条という袈裟十人分が古くなって困っておりました。このたび新潟市の荒川芳良さんより、亡父の供養にと新調して奉納の申し出をいただきました。早速京都の法衣店に注文しましたので、今年のお盆には新しい袈裟で法要ができます。ありがとうございました。

妙光寺史話

〈角田山御歴代控〉より（二）

三、日蓮宗宗学に優れた住職

（つづき）

能化（のうけ）（中村檀林の主長＝学長）に就任された住職の中で特に立派な業績を残され、日蓮宗の中で有名なのは、三十五世日寿（にちじゅ）上人である。

「歴代住職控」には、寛政五年入山、享和三年、相州三浦、大明寺へ御入山。御在寺十一年、書物七巻出来、改判後本誌遠藤氏へ納候様、京都妙覚寺江申来候ニ付、運師（日運）尊前より添状御附、遠藤氏二十六代正辰江御形身ニ被遣候」と記されている。

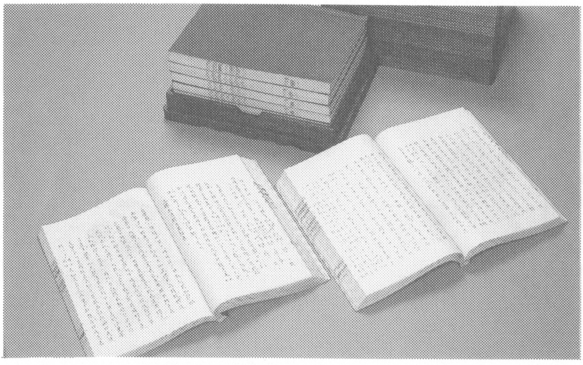
書物七巻とは「祖書網要刪略（そしょこうようさんりゃく）」と名付けられ、上人自筆の稿本が妙光寺に現存し、巻町の文化財に指定されている。

「初版・妙の光第三号」によると、当時、日蓮宗学が体系的に組織されていないので、日蓮宗門の将来が憂慮されていたという。この情勢に奮起し、中村檀林の青年学僧五名が、日蓮大聖人の教義を組織立てて宗学を打ち立てようと誓約し合ったのが寛延二年（一七四九）。以後、鋭意研究が重ねられたが、同志は次第に死没し最後に、熊本の一妙院日導上人が「祖書網要」二十三巻を著した。しかし、あまりにも大部で初学の人には難しいと、要約の作業に着手するが途中で亡くなる。だが、その意志は後輩に受け継がれていった。最後に「祖書網要」の要約として完成されたのが、日寿上人であった。

初めに青年学僧が盟約してから、五十年の歳月が流れた寛政十三年（一八〇一）の春脱稿した。

刪略附録の奥書に、「寛政十三年の春、六十有一、莞爾（にっこり）として筆を机上に放ち、合掌して南無妙法蓮華経と唱えた」と記してあるという。

この原稿は学友日運によって早速上梓出版された。



「祖書網要刪略」原本
（写真提供・巻町教育委員会）

日導上人の祖書網要二十三巻の主旨、文勢をそこなわず、内容を巧みに凝縮し、更に日寿上人の批評、感想を織り込み七巻にまとめるのに三年を要した。以後宗門では、二十三巻本よりも、日寿上人の七巻本が流行し、檀林の教科書などにも採用されるなど、入門書、概説書として今日に至っている。

日寿上人を妙光寺三十五世の住職に推薦されたのは、京都本山妙覚寺四十七世の住職、日琮（にっそう）上人だと言われている。日琮上人は西蒲原郡巻町五ケ浜、遠藤家の出身である。

学友日運上人は、京都本山妙覚寺四十八世、京都大本山山本囮寺三十六世を歴任された。

四・遠藤家に縁のある住職

五ケ浜の遠藤家に縁のある住職、さらにはこの住職のお弟子や推薦によって、妙光寺の住職になられた方が多い。

三十一世　日饒上人

遠藤家十九代の子で、元禄十五年（一七〇二）より寛保三年（一七四三）の間、四十二年御在寺とある。

日饒上人のお弟子

・三十二世　日遥上人

・三十三世　日耀上人

日琮上人　遠藤家の出身で京都大本山本囮寺三十六世。

日琮上人の推薦によって妙光寺住職になられた方

・三十五世　日寿上人

日琮上人のお弟子で妙光寺住職になられた方

・三十六世　日研上人

・三十七世　日妙上人

日寿上人像

・三十九世　日泰上人

遠藤家の先祖、遠藤左衛門尉藤原正遠は、日蓮大聖人が文永八年（一二七一）、鎌倉より佐渡へ流罪になられた時、護送の役人であった。道々、日蓮大聖人の教化に浴し、佐渡での流罪中の三年間、聖人の御給仕につとめられた。

遠藤家では代々妙光寺の檀徒総代として、寺の興隆に尽力してきた。特に遠藤家出身の住職、お弟子、推薦によって妙光寺へ着任された住職の時代は、物心両面にわたって貢献され、檀徒全体のリーダー的存在として尊敬されていたことであろう。

能化に就任された住職、日寿上人、日研上人、日泰上人等、皆日琮上人の推薦か、お弟子であることを考えると、故郷の妙光寺の興隆発展を望んでいた日琮上人のあつい想いが感じられる。

（石田誠太郎）

次号は

五・全山焼失―諸堂建立について

本ができました

昨年八月の「第五回フェスティバル安穏」の記録が本になりました。テーマに関心が高く、「参加できないが記録だけでも欲しい」という声が多かったことと、五回目ということで作りました。以前お願いした、老人ホーム希望のアンケート結果も、ここに収めました。

既に読まれた方々からは好評をいただいてます。妙光寺の自費出版で、制作実費程度は回収したい事情があります。檀家、会員割引で一冊でも千円ですので、会員とご記入の上、ぜひお申し込み下さい。お友達の分など、何冊かご協力いただけると大変ありがたいのですが。

今年のフェスティバルは、八月十九日、二十日に決定しました。詳細は協議中ですが、方針としてできるだけ会員の方に多く参加していただく。気軽に参加していただくために、妙光寺での宿泊を予定しています。

さらに交流パーティーを、十九日夜に、今や全国的話題の地ビールのパブレストランで、上原社長のご好意で貸し切りにして行ないます。上原さんには、第一回フェスティバル安穏から、法要の演出を担当していただいてます。

このフェスティバルで第四、五回のスタッフとしてお手伝いの、鎌倉市の青年僧で松協行真さんと、新潟市の渡辺祐子さんが、このご縁で四月十五日に結婚されました。住職が初めての仲人を務めました。

住職が先頃講演で伺った新潟県能生（のう）町の福祉課で、軽費老人ホームの入居者を募集しています。この四月新築オープンで定員が三十名。六十歳以上の夫婦か単身者が対象で、県外の方でもいいとのこと。行政がやるので安価で安心。併設して診療所、特養老人ホーム等も完備して、病気になっても心配いりませんとのことです。

町民に希望者が多かったので建設したところ、親戚や子供に反対されたのでと、入居者が定員割れして困っているのだそうです。能生町は新潟県の西の端で、蟹が有名な海沿いの町。妙光寺からは車で二時間余りです。妙光寺にパンフ有ります。

寺庭から

住職はサラリーマン（その二）

私がかつて公務員をしていた頃、年休という有給休暇が認められていました。詳しい日数は忘れてしまいましたが、職員組合もしっかりしていて、とても働きやすい職場でした。まだまだ若かったせいか、「仕事をする」という実感はその時間内だけで、夕方仕事が終わればあとは何処へ行こうが、何をしようが自由だったのです。

妙光寺で決まっているのは毎月の給料の金額だけで、あとは適当、ファジー？なものです。暇な時に休んで、暇がなければ休まない。どうしても疲れたら日中でも少し横になる。その時間の使いかたを自分でうまくコントロールしながらやっているわけです。会社のきまりも上司からの命令も無いのですが、かといって自分で仕事を決めるわけにもいきません。お葬式などは突然のものですから。

ならば住職というのは、どういう職種に該当するのでしょうか。会社員デモないし、自営業でもない。お金の面ではサラリーマンでも実はそうではないと思います。

自分が生きて行くための仕事でありながら、仕事と簡単に割り切れないもやもやとした感情が渦巻いています。私は夫としての住職を補佐するだけでも悩んでいるのに、住職としての僧侶の方々はいったいどんな気持ちでいるのでしょうか。

考えるに、お布施の収入で住職の生活を支える、という今の状況が本当は良くないのかも知れません。安穏の基金のように妙光寺にもお布施に変わる一定の財源があって、たとえ誰が住職になっても最低の生活だけは保証出来ること。お布施はすべて布教や世のため人のためになる活動をして、仏教の教えを広め、人々を救う手助けをする、きちんとしたシステムがととのっているのならどんなに良いでしょう。檀家の方々は違いますが、私の友達ですら「まるもうけ」と思っている人がなんと多いことか。

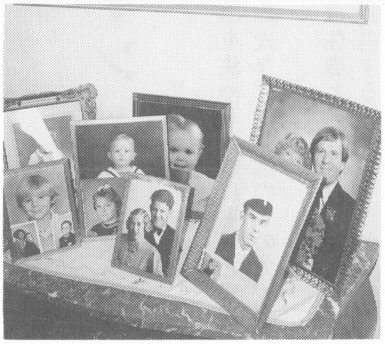
曖昧な制度の中で、誇りをもって仕事をすることの辛さ、仏教の教えに近づきたいと願えば願うほど現実と隔ってしまう矛盾を抱えながらも、いつも誠実でありたいと思っているのですが。

小川なぎさ

北欧の高齢者

余命六ケ月と宣告されたホスピス病棟のAさん

老人ホームのBさんと孫の写真



グループホームの痴呆性老人

あとがき

またもや遅れに遅れて恐縮です。嫌な事件の多い世の中になっています。せめて心暖まる「妙の光」を、と心がけているのですが、いつも時間に追われて思うようにいきません。

一方的な妙光寺からの連絡にしたくないのですが、どうも今回はその傾向が強くなってしまいました。年度がわりの時期ということでお許し下さい。

八重桜、ツツジ、ナデシコ、等々これからも花の時期が続きます。新緑も最高、鳥のさえずりも賑やかです。心のやすらぎに境内へお出かけ下さい。次号は六月末の予定です。

（小川記）